

G T 代表 藤森平司先生 古希のお祝い並びに出版記念会

第92号 2018年12月3日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

古希祝兼出版記念パーティー

2018年11月12日にG T 代表の藤森平司先生の古希祝並びに、
出版記念会を京王プラザホテルにて開催しました。

全国のG T 園を中心に約250名の先生方が集まり、
藤森先生の古希祝い、並びに出版記念会を祝しました。

プログラム

- ・開会・乾杯
- ・記念撮影
- ・歓談（ビデオメッセージ、スライドムービー）
- ・花束贈呈
- ・職員よりスピーチ、お祝いメッセージ
- ・歓談
- ・古希祝記念スピーチ
- ・閉会

主催：藤森平司先生出版記念会実行委員会

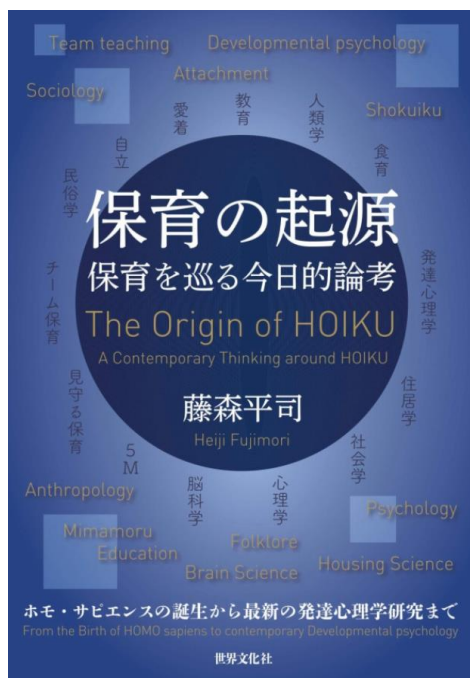
日時：2018年11月12日（月）

会場：京王プラザホテル(東京都新宿区西新宿 2-2-1)
エミネンスホール

参加者：250名



当日の会場の様子



『保育の起源』表紙

【目次】

- 1章 人類の進化から考える保育
- 2章 人類学から考える保育
- 3章 民俗学から考える保育
- 4章 脳科学から考える保育
- 5章 住居学から考える保育
- 6章 社会学から考える保育
- 7章 心理学の見直し
- 8章 発達
- 9章 教育
- 10章 乳児研究
- 11章 愛着
- 12章 自立
- 13章 見守る保育
- 14章 見守る保育における意図性
- 15章 異年齢児保育
- 16章 チーム保育（人という環境）
- 17章 室内環境
- 18章 屋外環境
- 19章 見守る保育における5M
- 20章 食育
- 21章 リーダー論
- 22章 海外の保育

「保育の起源」はじめに より

保育とは、そしてヒトとはそもそも何なのか。

ホモ・サピエンスの誕生から最新の発達心理学研究まで、
300万年の時空を駆け抜ける闊達自在な論考の先に目指すべき
保育の明日が見えてきた。進化し続ける藤森保育学。

2018年11月12日のマイルストーン。記念すべき今日

この時から未来への大きな一歩がまた新たに、踏み出される。

私が今まで、直感として感じていた赤ちゃんの持つ力が、さまざまな研究によって裏付けられるようになりました。共感し、協力するという、赤ちゃんが持っている力は、そもそもヒトと人類猿を分かつ大きなポイントであり、ヒトをヒトたらしめる大きな要素であるということもわかってきました。そうした赤ちゃんの力を損なわないように伸ばすのが保育だとしたら、保育もまた、ヒトをヒトたらしめるものであり、ヒトという種が生まれたときから現在まで続いてきた、とてつもなく大きな営みであると強く思うようになりました。

本書のタイトルを「保育の起源」としたのは、そうした気持ちからです。本書では、数章にわたり、今盛んに発見、見直されている赤ちゃん（人間）の持つ生きる力について、さまざまな研究や事例を紹介しています。また、人類がずっと行ってきた（あるいは持ってきた）生き方・生きる力を再認識し、望ましい形の未来を展望していくという意識は、本書に通底するテーマでもあります。本書が、読者の皆さんの、そして私自身の保育の未来が明るく楽しいものになるための一助となれば幸いです。

「保育の起源」 保育をめぐる今日的論考

The Origin of HOIKU A Contemporary Thinking around HOIKU

著者：藤森平司

発行：株式会社世界文化社

古希祝記念スピーチ

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

私は目指しているところは出している本があるが、私たちは地球上に存在する人類の全ては中央アフリカから出たホモサピエンスです。いろいろな人族が誕生したが、結果的にすべて滅びて、私たちホモサピエンスだけが生き残っています。特に最近の研究では、ネアンデルタール人は頭もいいし、道具も使うし運動能力も優れている。しかし、滅びてしまった。なぜ優れているネアンデルタール人が滅びて、ホモサピエンスが生き延びたかという、私たちは、ネアンデルタール人より智慧がないので集団を構成した。その集団が大きかった。集団が多いと知恵を出し合える。道具を使ったのは、最初はネアンデルタール人だが、その石器はほとんど進化していない。ホモサピエンスは進化して、飛び道具も作っている。皆で協力する力があつたから、ホモサピエンスが南アフリカから地球上に旅に出る。グレートジャーニーという偉大な旅です。その旅で、まず行ったのがヨーロッパです。ここに住んでしまおうというのがヨーロッパの人たちです。もっといいところがあるだろうと、冒険心・好奇心がある人たちがアジアに渡ってきます。その後、オセアニアに行き、日本に辿り着くのは容易ではなかった。アジアから日本に行くのは2つしかない。上から来ると寒い、極寒の地を越えてこないといけない。下だと海を渡ってこないといけない。何度も渡ろうとするが、凝りずつにするのは好奇心が強い。やっと辿り着いたのが日本人。何で辿り着いたかという、好奇心が強かったのと協力する力が強かった。特にチームワークがよくて、日本に辿り着いて、そう考えると、私は世界中の中で最も協力して、チームワークが強いのは日本人だと思う。ネアンデルタール人の遺伝子が少し混ざって、一番多いのは日本人だろうと言われている。日本人はそういう意味で私は、もっとも優れていると思っています。ある意味では、幼さが優れている証拠です。ネオトミーというが、大人のように成熟しているわけではない。昨日、上海で講演をしていたが、こういうことを話した。赤ちゃんは何も知らないし、何もできない。次第にできるようになります。これより、もっと出来るのは大人。大人は色々な事が出来ます。赤ちゃんから大人になることが成熟だします。大人よりもっとできるものはITです。ロボットが最も成熟した人なのか。この流れだと、成熟した人になってしまいます。これを逆で見ると、赤ちゃんは何もできない、何も知らないからやってもらわないといけない。その誰かは、出来る人にやってもらわないと生きていけない。そのために、赤ちゃんは出来る人を使いこなす能力を持っています。これが最近の研究で分かっています。泣き声も、早くやってもらいたい時は、人類にとっての危機は呼吸困難で、そのような泣き声をする。そうすると、大人は早くしなきゃと焦るそう。現場で分かると思うが、酷く泣くときは苦しそうな泣き方をする。実は偽装泣きと言われている。これは意図していないが、何とか赤ちゃんは生き延びようと大人を使いこなそうとする。次第に出来るようになるに、従ってその能力がなくなってきます。今後、そうするとITの社会になります。それを私たちは使いこなさいといけない。そうしないと、ロボットに使われてしまいます。その使いこなす方を私は理論を作りたい。赤ちゃんが大人を使いこなすことから学んで、私たちはこれからの時代にロボットを使いこなす方法を見つけたいといけない。一時、『哲学する赤ちゃん』の本がベストセラーとなり、有名になりました。あの作者がTVで講演をしていて観ていたら、最後に「もう少し、大人は赤ちゃんから学びましょう。ネオトミーという幼さを学びましょう」と提案をしていた。私は、そういう意味で赤ちゃんは有能だと思っています。一時期、何もできない白紙に大人が知識を与えるものだと考えられていたが、これは子どもにとっての作戦だったと考えたときに、そういう意味から赤ちゃんに一番近いのが日本人。今までの保育カリキュラムは、早く成熟していたヨーロッパのカリキュラムが世界中で使われている。アメリカも実は日本から渡った人たちは、ヨーロッパ

人たちにとって代わられてしまった。日本から行った先住民の人たちはあまりいないので、アメリカもヨーロッパに近い。アメリカやヨーロッパの保育カリキュラムをずっと学んできたが、ネオトミーという赤ちゃんらしさや、好奇心の強さ。有能な赤ちゃんの精神を受け継いでいる日本人から、カリキュラムを提案するべきだと思っている。協力するという人間本来の力を人類は忘れてきているように思います。私がシンガポールや中国で講演するテーマは、人類はもう一度、人類が協力して助け合うことを発信していきましょう、提案していきましょうと言っている。今は、自分の国だけいいという風潮になりつつある。そうすると人類は滅びてしまう。私たちは本来助け合って、生きていく生き物なので、今こそアジアから出すべきだと思っています。それから、ヨーロッパから出されているカリキュラムの多くは白紙論です。赤ちゃんは白紙だと思われる時代のカリキュラムなので指導する。誘導することが保育に出てきてしまっている。それが20年前に否定され、赤ちゃんは有能で、自ら学ぶ強力な学習者だと分かっています。それを引き出して、遺伝子として赤ちゃんから残してあげる。一時期、お母さんがいいと言って、二者関係で語られてしまっている。今日お配りする本にも書いているが、人類は、お母さんは9ヶ月になると赤ちゃんを膝からおろして離乳をします。おろされた赤ちゃんは、共同保育をされていきます。これが人類の進化の中ではっきりしています。これをいつまでも抱っこして、お母さんの元にいるのは、霊長類の中で人類以外で、チンパンジーは4歳まで抱っこしますし、オラウータンは7歳まで抱っこします。人類は9ヶ月でおろして、社会を学んでいく生き物が、私たち人類です。保育所、乳児保育というものが、これまでお母さんがベストの時代で、親信仰が強い中で、それが出来ない人が預かるのが乳児保育でした。それを進めていくと、私は人類は危ないと思います。乳児からの関わり、子ども同士が大事。集団にいたことが、人類にとって大事なことだと訴えないと、乳児保育は母親に元に戻ってしまいます。育休制度を延長しようとしているが、最近保育所で乳児保育がキャンセルされてきています。0.1歳の空きが出はじめています。落ちることを望み始めています。入りたいと言ってたのが、今は望んで落ちる事を望み始めています。落ちると育休が伸びるからですが、2歳まで家で育てているのは危ないと思います。保育界がもう一度、集団の大切さを訴えないと私たちは危ないと思います。私たちの仕事というより、人類が危ないと思っています。そういう意味の提案をしています。「見守る保育」と言う言い方は色々な捉え方があるので勇気があるが、私は藤森メソッドに変えたのは誤解を受けるので、そうではなくて、赤ちゃんから集団、子ども同士の関わりが大切。しかし、今の保育園のように働くためにあるだけでなく、10何時間も預けるのはおかしい。私は、育休を3歳まで伸ばすのではなくて、育児時間を3歳まで伸ばすべきだと思っている。3歳になるまでは4〜6時間くらいがちょうどいいと思っている。だからといって、家にいるという事はないと思います。私たち現場が子ども集団の大切さを訴えないと研究者は出来ない。乳児と子ども同士の関わりの研究は不可能です。よくチンパンジーで研究するが、チンパンジーは4歳まで抱っこされる生き物なので、それで研究しても無理。それから、集団で生きる生き物なので、今ブログで書いているのが、絶滅種のインコがいる。これは集団で生活しているが、絶滅種なので、人間が捕獲して育てています。でも人間が育てています。自然に返すと全員死んでしまいます。集団で生きる生き物を個別で育てても、生きられません。人類は、集団で生きる生き物なので、個別で育てて、二者関係で育てるなら、世の中では生きていけないと思います。私たちが関わっている乳児保育が重要な事です。発想を変えないと守れません。お母さんがいいとか、お母さんの関わりとか、丁寧に二者関係でやっている理論では、お母さんに返せばいいでしょうとなる。私は、どうも危ないと思っています。ぜひ、現場を持っている皆さんが、子ども集団の研究を研究者の人に出して、研究してもらうようにしないと、机上の学問を押し付けてもダメだと思っています。これが世界の全体的な流れです。OECDもそういう風に乳児の関わりを提案しています。私たちは人類の平和のため、協力し助け合う遺伝子を呼び戻したい。皆さんと一緒に、こういうことを深めて、実践をしていきたいと思っています。今日、集まって下さる皆さ

ん、こういう事で信仰が深められて、本来こんなに人が集まるのは、私の葬式くらいしかない。葬式で集まっても、皆さんはいいが私がない。私がいるうちに集まってもらいたい。本が集大成と言っていたが、私はまだまだ書き足りなくて、校正の締切の日まで差し替えて欲しいと言っていた。特に愛着の部分を差し替えたいと言っていた。今も本を出した後、次を書きたくてしょうがない。今度は喜寿を目指して、何年後になるか。以上になります。今日はありがとうございました。

本稿は、2018年11月12日に行われた古希祝記念スピーチの内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
＼ QRコードからお願いします。／